

# メアリー一世のアトラスにおける支配の徴表

## Distinguishing Marks in the Queen Mary Atlas for the Domination

小川 知幸

はじめに

近世ヨーロッパでは、15世紀における古代の地理学者プトレマイオスによる『地理学』Geographiaの発見によって<sup>1</sup>、それまでのT-O図にみられるようなマップ・ムンディの象徴的世界観から脱却し<sup>2</sup>、世界の実際の形状への関心が高まった。これに三角法による測地技術、また天体観測技術の向上による恒星理論の発展などにより<sup>3</sup>、学的複合領域としてのコスモグラフィー（天地理学）が誕生する<sup>4</sup>。その具体的表象として製作されたのが写本あるいは印刷本としてのアトラス（世界地図帳）であった。アトラスは改訂を繰り返し、しだいにその精度を向上させていくが<sup>5</sup>、続く16世紀には為政者による領域支配、「神命」としての支配の正当性を証明す

るための象徴的・図像的道具としての役割を担うことになった<sup>6</sup>。したがって、アトラスの製作とは、いわば国史編纂としての役割をも担ったのである。これは当時の覇権的勢力としてのスペイン、またイングランドに顕著であったといえよう。

ところで、イングランドへの亡命ポルトガル人であったディオゴ・オーメン（Diogo Homen）なる人物により1558年に製作されたという『メアリー一世のアトラス』Queen Mary Atlasという写本地図集が存在する。これは、ポルトラーノ図（羅針儀海図）を中心とした12枚のヴェラム製の世界地図帳であり<sup>7</sup>、19世紀に大英博物館で再発見された。そのなかにある9つの地図のうち、

- 
- Geographiaのヨーロッパにおける発見は、1397年にフィレンツェの書記官長で人文主義者であったコルッチョ・サルターティがギリシア語の教師としてビザンティンの外交官であったマヌエル・クリュソロスを招聘したことに端を発する。クリュソロスが携えてきた書籍のひとつに、ギリシア語のGeographiaが含まれていたのである。トビー・レスター『第四の大陸』中央公論新社、2015年、189頁参照。同じエピソードは、山本義隆『世界の見方の転換I』みすず書房、2014年、94頁とその註にも見出されるが、ただし招聘された年代は1394年とされている。ギリシア語のGeographiaを初めてラテン語に翻訳したのはヤコポ・アンジェリという人物であり、1406年から1409年までのあいだであった。そのさいに、Geographiaは『コスモグラフィー』（天地理学）というタイトルに変更され、手稿はローマ教皇アレキサンデル五世に献呈された。
  - T-O図はセヴィーリヤ大司教イন্দールスの『語源論』Etymologiae写本（9世紀）を嚆矢とし、Oは既知の世界とその周辺を環流する大海原、Tはロシアのドン川からナイル川にいたる子午線で区切られた地中海の軸を表している。東を上にして上部にアジア、下部ひだりにヨーロッパ、みぎにアフリカを配するのが特徴であり、この構造は13世紀後期のイングランドにおけるヘレフォード図などにも継承されている。なお、このマップ・ムンディの象徴的世界観は、15世紀以降にもたびたび復活している。たとえば、ハインリヒ・ビュンティンクによる三つ葉のクローバー型の世界図もその一種であろう。ケネス・ネベンザール『シルクロードとその彼方への地図 東方探検2000年の記録』ファイドン、2005年、26-37頁などを参照。
  - 山本、前掲書では、15世紀後半におけるウィーンのポイルバッハとその弟子のレギオモンタヌスによる天文学（天体観測）、ネーデルラントのヘンマ・フリシウスによる三角測量技術の改良などを論じ、プトレマイオスの地理学、すなわち古代の世界像が徐々に更新されていく過程を描出している。
  - 合田昌史『マゼラン—世界分割を体現した航海者』京都大学学術出版会、2006年、10頁、またその註を参照。
  - アブラハム・オルテリウス『世界の舞台』Theatrum Orbis Terrarumは1570年に初版が刊行され、その後、オルテリウスの没した1598年までを数えても、各国語で35もの版がつくられた。ラテン語13版、ドイツ語5版、フランス語5版、スペイン語5版、オランダ語4版、イタリア語2版、そして英語1版。死後版も13版ある。増補改訂も5回にわたり、収録地図は当初の3倍をこえる166枚まで拡大した。小川知幸「グローカル化する近代地図帳」『東北大学総合学術博物館ニューズレター Omnividentis [オムニヴィデンス]』No. 41, 2012年、4-6頁。
  - クリストファー・サクストン（Christopher Saxton）による1579年のイングランドとウェールズの地図帳（Atlas of the Counties of England and Wales）が、ヨーロッパで最初の国家の地図帳といわれる。これは王室の支援を受けた事業であり、地図帳の扉絵には左手に帝国宝珠をもつエリザベス一世が堂々とした姿で描かれている。John Rennie Short, *The World Through Maps: A History of Cartography*, London, 2003（邦訳『世界の地図の歴史図鑑』終風舎、2011年）。
  - British Library, Diogo Homem, *Queen Mary Atlas*. 1558. Department of Manuscripts. Add. Ms. 5415A. また、ポルトラーノとは、辞書的な定義からいえば14世紀ころから用いられた航海用の海図であり、その名称が「港に関係する」という意味のイタリア語に由来するように、海岸線や島嶼、岬や港などが詳細かつ写實的に描かれていた。海図上に配置された複数の羅針儀（コンパス・ローズ）からは32本の航程線が伸びており、それを目安にして航海したという。これは船乗り（水先案内人）のいわば手引き書であり、基本的には、その経験を集積して描かれたものであった。Portolan Chart, in: *Encyclopaedia Britannica* (<https://www.britannica.com/technology/portolan-chart>), ポール・ズムトール『世界の尺度』法政大学出版局、2006年、363頁以下、また、宮崎正勝『海図の世界史』新潮選書、2012年、各所を参照。

とくに南米大陸を中心とした地図には、「人を食う人間たちが人肉を食い毒矢で戦う」ようすがテキストとともに大きく図像として描かれている。また、インディオが矢を放つ先にはスペインの軍隊と推定される群衆やポルトガルの紋章が描かれており、明らかな政治的メッセージを含んでいるとおもわれる。他方、ディオゴの地図は、当時最高峰のアトラスであったオルテリウスの『世界の舞台』でも援用されており<sup>8</sup>、上記の図像がたんなる偶発的な地誌的・民俗的描写でないことは論を俟たない。

そして、この地図集がイングランド・テューダー朝

の女王メアリー一世（在位 1553—1558 年）から、後のスペイン国王フェリペ二世に贈与されたといわれるものであることが、その名称の由来であり筆者がこの資料に注目する大きな理由である。

そこで本稿では、この写本地図集『メアリー一世のアトラス』にあらわれた「支配」にかかわる徴表を分析することで、16世紀の総合科学であるコスモロジーにより支援された覇権的国家の領域性にかんする理解と、そのトランスナショナルな承認関係の成立過程を解明するための予備的考察をおこなう。

## 1. バリャドリード論戦

さて、地図を分析する前に、まずその歴史的背景を明確にしておきたい。1550年からその翌年にかけて、スペインの宮廷所在地であったバリャドリード（Valladolid）において、ある論戦が繰り広げられていた。それは、大航海時代に発見された新天地、とくに南米大陸における先住民インディオにたいする過酷な現状を批判するドミニコ会士バルトロメ・ラス・カサス（Bartolomé de las Casas）と、スペインの征服と支配を擁護する法学者ファン・ヒネス・デ・セプールベダ（Juan Ginés de Sepúlveda）とのあいだの、いわゆる「バリャドリード論戦」である<sup>9</sup>。

当時のスペイン国王、すなわちカスティーリャ・レオン王国のイサベル女王とアラゴン王国のフェルナンド五世（二世）は、ローマ教皇アレキサンデル六世による1493年の「贈与大教書」により、コロンブスの発見以後の新世界（Mundus novus）の土地の領有権とその住民のキリスト教化を委ねられたと解釈し、スペイン人入植者（エンコメンデロ）のインディオにたいする軍事的・経済的、またその精神的支配を後押しした。それは1512年の「ブルゴス法」（エンコメンデロの、インディオにたいする義務の規定）、1513年の「勸降状」（インディオとの戦闘に入る前に読み上げられるスペイン語の降伏勧告）により、いっそう強化されるこ

とになった。その結果が、当初の人口38万人から3万4千人まで激減したというインディオの大量死であり、続く周辺諸島への奴隷狩りであったことはよく知られている。

こうしたインディアス（現在のカリブ海地域を含むスペイン領新大陸の総称）におけるスペイン支配は、次のハプスブルク家出身の国王カルロス一世になってもいっそう変化のきざしはなく、むしろ、入植者のもたらす戦利品や金・銀の鉱物資源が王室の重要な財源に、またヨーロッパにおける戦費となったために、ますます強化されることになった。しかし、その支配の正当性に厳しい批判の矢を向けたのが先述のラス・カサスであり、それに応じたのが国王フェリペ二世の私教師でありアリストテレス主義者であったセプールベダであった。

インディオにたいする戦争とその奴隷化の禁止を強く求めるラス・カサスにたいし、セプールベダは、アリストテレスなどを引用しながら、普遍的規範である自然法に反する大罪を犯しているインディオは、攻撃し支配できるという。なぜならばインディオは、「人肉嗜食という、とくに自然に反する、身の毛もよだつような重罪を」犯しており、これを「排除し、神の代わりに悪魔が崇拜されるのを避ける」ためには、キリス

8 P. van der Krogt, P. Meurer, M. van den Broecke (ed.), Abraham Ortelius and the First Atlas, Leiden, 1998, p. 99; Catalogus: Chart of Europe (Venice, 1569).

9 この論戦にかんしては、染田秀藤「セプールベダとラス・カサスの論争—『異論』と『反論』—」『E studio hispanicos』5, 1979年, 113-130頁, また松森奈津子「16世紀スペインにおける征服戦争正当化の論理—セプールベダとその影響—」『政治思想研究』3, 2003年, 81-96頁なども参照。

ト教世界の国民、とくにスペイン人がこれを支配せねばならないからであった<sup>10</sup>。セプールベダが論戦のために準備した（というよりはその出版計画が論戦を誘発したといえる）『第二のデモクラテス』では、つぎのように語られている。少し長くなるが引用したい<sup>11</sup>。

「哲学者たち（アリストテレスら——筆者註）の教えるところでは、……人間のなかには、自然本性からして主人である者と奴隷である者がいるのです。思慮分別や才能に優れた人びとは、たとえ肉体的に頑強でなくとも、生まれながらにして主人であり、それに引き換え、必要な義務を果たすに足る体力を備えていても、愚鈍で理性に劣る人びとは生来の奴隷です。さらに、……生まれながらにして奴隷である人たちにとって、自然本性からして主人である人びとに仕えるのは正しいことであるばかりか、有益なことでもあります。」

「野蛮で非人間的な国民がいて、……いま述べたような罪をすべて、あるいはその一部を醜悪なこととみなさず、法律や道徳で処罰しなかったり、重罪、なかでも自然がとくに忌み嫌う罪にたいして軽微な罰しか与えなかったり……すれば、当然のことですが、その国民は自然法を遵守していないと言っても間違いではありません。聖アウグスティヌスによれば、それに該当するのがソドムとゴモラの住民を訴えるあの大きな叫びなのです。」

「そのような国民がキリスト教徒の支配を拒否した場合、キリスト教徒が彼らを、その野蛮な性質と非人間的な行為、それに忌まわしい罪を理由に、滅ぼすことができるのは当然でしょう。しかも、その国民は滅ぼされることで、大きな恵みを受け取ることとなります。なぜなら、この上なく邪悪かつ野蛮で、不敬な人びとは、善良で文明化した、そして、真の宗教を奉じる人たちに服従すれば、彼らの指導や法律のもとで、また、彼らとの交わりを通じて、慈悲心や文明を身につけ、救霊を得ることができるからです。そうなれば、

キリスト教の愛が命じる最大の義務がまっとうされることとなります。」

「野蛮人たちが犯しているそのような罪、その他、この上なく忌まわしい行為は、聖アウグスティヌスが言っているように、司教や教会関係者よりも、地上における審判者、つまり、世俗的身分の権威者によって処罰されるのがふさわしいのです。……したがって、異教徒であることのみならず、想像を絶する人身犠牲と無辜な民に加えられる甚だしい不正、身の毛もよだつ人肉の饗宴、それに不敬な偶像崇拜、こうしたことも野蛮人を相手に戦争をおこなうごく正当な根拠となるのです。」

このように、セプールベダは、文明化されたキリスト教国の人びとにより、わけてもその君主により、自然的奴隷である野蛮な者たちが征服されることは正しいとする。さらに、なぜスペイン人なのか、フランス人やイタリア人ではいけないのか、という問いにたいしては、「最高の権利はもつとも思慮分別を備えた、善良で、正しく、そして、敬虔な国民に属するのです。そのすべての点で、スペインと肩を並べられるような国はほとんどありません」と答える<sup>12</sup>。これは、自然という普遍的規則を後盾にした一種のグローバリズムであり、同時に一国の覇権的国家を承認するものであったといえる<sup>13</sup>。とくに、カニバリズムや人身御供など、セプールベダが実見したわけではなかった「悪習」がたびたび俎上に挙がり、人びとの本性として位置づけられていることに留意すべきであろう。この論戦は、しかし、この二人の哲学や聖書にかんするあまりに該博な知識のためにあたかも神学論争の様相を呈してきたこともあって、所期の目的から逸脱し、双方に明確な決着を見ることなく終了したという<sup>14</sup>。そして、これに答えるかのように1558年に製作されたのが、ディオゴ・オーメンによる『メアリー世のアトラス』であった。

10 セプールベダ（染田秀藤訳）『征服戦争は是か非か』岩波書店、1992年、172頁

11 上掲書、83、134-135、141頁、ただし、一部の漢字・仮名遣いは改めた。

12 上掲書、169頁

13 異教徒と自然法、また、文明の義務としての野蛮の征服については、山内進編著『「正しい戦争」という思想』勁草書房、2006年、68頁以降参照。

14 染田、前掲論文、121頁以降参照

## 2. デイオゴ・オーメン

デイオゴ・オーメンは、おそらく1520年ころにポルトガルで生まれた。出生地は知られていないが、彼の父親は、「ミラー・アトラス」Atlas Miller (1519年)として知られる地図帳の製作者ロポ・オーメン (Lopo Homen) であり、ロポは、ポルトガル国王マヌエル一世の依頼により、ペドロとホルへのレイネル父子 (Reinel, Pedro & Jorge) とともにこれを製作したとされているため、王宮所在地のリスボンを拠点としていたに違いない。デイオゴは、当代随一の地図製作者である父からカルトグラフィーの技術を学んだのだろう。しかし1544年に、ある殺人事件の被告となり、モロッコの獄舎への収監を宣告された。高額な保釈金を積み、いったんは執行猶予がついたが、その期限が切れる前にポルトガルを離れ、イングランドへと亡命したという<sup>15</sup>。

その頃イングランドでは、ヘンリー八世が対仏関係からスペイン国王カルロス一世 (皇帝カール五世) と同盟関係にあり、ポルトガルの官憲の追求が及ばないと判断したのかもしれない。また、ヘンリー八世は、すぐれた外国人地図製作者を多数雇用していた<sup>16</sup>。それは、イングランドとウェールズの領域図の作成と、いちは諦められていた西廻り航路の開拓に関係していたとされる。デイオゴがそのような地図製作者のサークルに加わったかどうかは不明であるが、少なくとも1547年まで、デイオゴはロンドンを拠点としていた。しかし、同年ヘンリー八世が死去し、父ロポの懇願もあって、ポルトガル国王ジョアン三世により、デイオゴの特赦が提案された。ただし、それには二つの条件があった。デイオゴが8か月以内に帰国すること、そして、その地図作製の技術は、今後いっさい他国のた

めに用いぬこと、であった。

とはいえ、デイオゴは、結局二度と故国に戻ることはなかった。上記の条件からは、かれの技術が高く評価されていたことがうかがわれる。その後デイオゴはロンドンとヴェネツィアを行き来し、いくつかの地図を製作した。1555年から1559年まではロンドンに居住して、このときに製作した地図集が、『メアリー一世のアトラス』となった。

ヘンリー八世の嗣子メアリーは、イングランド史上最初の女王として、1553年に即位してメアリー一世となった。1554年にスペイン国王フェリペ二世 (当時は皇太子) と結婚し、これによりフェリペには共同統治者としてイングランド王位が与えられた。メアリーはこのアトラスをフェリペに与えたといわれる。製作の経緯は不明だが、後に見るように、少なくともこの地図集には、スペインの存在が強く意識されているといえるだろう。

デイオゴは1566年に、新教皇に選出されたピウス五世のために地図を製作し、1567年にロンドンに戻ったとき、いとこが起こしたある事件を理由に投獄された。そのせいか、翌年ロンドンを離れると、その後はヴェネツィアに居住し、その地で1576年に死去した。

以上のように、デイオゴ・オーメンの生涯やその思想について明らかなことはけっして多くはないが、すぐれたアトラスの製作が、このような個別の「技能者」practitionerによって担われていたことを知る上で興味深い<sup>17</sup>。問題は、製作者の思想にあるのではなく、それが作られた政治的状況とそこにあらわれる表象のなかにある。

15 Peter Barber, *The Queen Mary Atlas: Commentary*, London, 2005, pp. 34-38.

16 E.G.R. Taylor, *French Cosmographers and Navigators in England and Scotland 1542-1547*, in: *Scottish Geographical Magazine* 46, 1930, pp.15-21.

17 たとえばクリスティアン・スクローテン (Christian Schrooten) は16世紀のネーデルラントで国王委任官 (Cosmographe du Roy) として三角法による測地により精巧な地方図を製作した。小川知幸「闇に消えた地図製作者クリスティアン・スクローテン」『東北大学附属図書館調査研究室年報』第2号, 2014年, 1-12頁。

### 3. 『メアリー一世のアトラス』

このアトラスの名称は、1844年にこれが大英博物館で再発見されたさいに付されたものであり<sup>18</sup>、もともとの表題はない。先述のように、12枚のヴェラム製シートからなり、それぞれのシートの大きさは、約60×80センチメートルである。インクと不透明水彩により描かれており、一部に金箔が使用されている。アトラスの構成は、下表の通り、①太陰暦および太陽暦、②世界帯域図（ゾーンマップ）、③太陽偏角表、④世界図、⑤ヨーロッパ大陸西岸、⑥西地中海、⑦南大西洋、⑧アフリカ東部および西インド洋、⑨東インド、⑩北大西洋、⑪太平洋東部およびアメリカ大陸西部海岸線、⑫南米大陸からなっているが、これらの名称もまた便宜的に付けられたものであって、当時の印刷地図では

一般的な、カルトウーシュ（cartouche）の飾り枠による表題は付されていない。序文や献辞などの記載もないため、製作の背景は明確でないが、いずれにしてもその造りから、このような写本地図集の製作には大きなコストが推定されるので、少なくとも貴顕などから受注しての生産であったことは間違いないだろう<sup>19</sup>。

また、その構成から、アトラスが既知の世界の全体を意識しながら、西廻りおよび東廻り航路を中心に描かれた航海図であることも明白である。5番目以降の地図（海図）はすべて、複数の箇所にコンパス・ローズを配置した、ポルトラーノ図である。ここでは支配の徴表を考察する上でもっともユニークな12番目の南米大陸の地図を分析したい（図1）。

表：『メアリー一世のアトラス』における地図等の構成

No.	構 成	
①	太陰暦および太陽暦	Lunar and Solar Calendars
②	世界帯域図（ゾーンマップ）	Zonal Map of the World
③	太陽偏角表	Tables of Solar Declination
④	世界図	World Map
⑤	ヨーロッパ大陸西岸	The Western Coasts of Europe
⑥	西地中海	The Western Mediterranean
⑦	南大西洋	The Southern Atlantic
⑧	アフリカ東部および西インド洋	East Africa and the Western Indian Ocean
⑨	東インド	The East Indies
⑩	北大西洋	The Northern Atlantic
⑪	太平洋東部およびアメリカ大陸西部海岸線	The Eastern Pacific and the Western Coastlines of Americas
⑫	南米大陸	South America

18 John Holmes, *Catalogue of the Manuscript Maps, Plans and of the Topographical Drawings in the British Museum*, 1844.

19 近世の写本製作にかんしては、小川知幸「15世紀における手写本の伝統と革新—読書と読者のソシアビリテ」、阪本浩・鶴島博和・小野善彦編『ソシアビリテの歴史的諸相—古典古代と前近代ヨーロッパ』南窓社、2008年、181-196頁を参照。



図1 『メアリー一世のアトラス』における新世界(南米大陸)

この地図は中央に大きなコンパス・ローズを配し、その上下に、「第四の大陸」Quarta orbis pars, また「新大陸」Mundus novus と記されている。これより小さな文字で記されているのが、ブラジル (Brasilis), アルヘンティーナ (Terra arge(n)tea), およびペルー (Peru) の地名である。これらの地名と同程度の大きさで、へビのような形で流れるアマゾン川の上方に記されているのが、アメリカ (Americas) の文字である。新大陸を初めてアメリカという名称でしめたのは、1507年のマルティン・ヴァルトゼーミュラーの世界図であったが、その後の地図ではこの名称は削られてしまったという<sup>20</sup>。この文字のサイズは、「アメリカ」が新大陸の代名詞としてはまだ十分に承認されていなかったことを示唆しているのかもしれない。このアメリカの文字のすぐ上にある盾型紋章は、フェリペ二世時代のスペイン王家の紋章と一致する (図2)<sup>21</sup>。したがって、アメリカの文字とスペインとは強く結びつけられているようにもみえる。さらに、これらの左下に、アマゾン川を挟んで配置されている群衆は、おそらくピサロ (Francisco Pizarro) の

軍隊である (図4)。城塞の周りに複数のテントを張り、野営地で露営しているようである。ピサロは1531年から1535年にかけてペルーのインカ帝国を征服した。地図上の「ペルー」の地名表記とも合致するだろう。

いっぽうで、右上部の「ブラジル」の地名表記の下にある紋章には、真ん中に5つの盾とその周辺に7つの砦が配されており、上部に王冠が載せられている。ポルトガル王家の紋章である (図3)。そして、この紋章に向けて弓を引く大きな人影がみえる。その装束からインディオであることが明らかである。したがって、この表象には、ポルトガルにたいして敵対的であることが含意されている。すでに1494年に、新大陸は、スペインとポルトガルのあいだでトルデシリャス条約 (植民地分界線にかんする協約) により分割されており、他方ブラジルは、1500年にカブラル (Pedro Álvares Cabral) がそこに到達したことを根拠にポルトガルに与えられていた。地図は、このような政治的状況を正しく反映しているといえるが、しかし、見る者にとっては、ややスペイン寄りの印象を与えるのである。



図2 地図に描かれたスペイン王家の紋章



図3 地図に描かれたポルトガル王家の紋章

- 20 1500年ころ、人文学者のマティアス・リングマン (Matthias Ringmann) と地図製作者のマルティン・ヴァルトゼーミュラー (Martin Waldseemüller) は、ロレーヌ地方ヴォージュ山地のサン・ディエ (Saint Die) を拠点にプトレマイオスの Geographia の研究に取り組み、その改訂版『天文学入門』(1507年刊)の付図としてこの地図を製作した。アメリカの名称は、いうまでもなく、アメリゴ・ヴェスプッチに由来する。ただし、この名称は、新世界発見の名誉をクリストバル・コロン (コロンブス) に与えるのが当然とする人びととのあいだで議論を巻き起こした。前掲『第四の大陸』, 385頁以降を参照。
- 21 スペインのパンプローナ (Pamplona) にある聖堂の祭壇に掲げられた紋章がこれである。パンプローナはかつてのナバーラ王国にあり、この王国は1516年にスペイン国王フェルナンド二世により征服され、カスティーリャ女王フアナ一世に継承された。その長男がカルロス一世、さらにその息子がフェリペ二世である。

さて、これらの表象よりもさらに重要なものが、中央部のアマゾン地方に描かれたインディオたちである(図5)。10人以上の半裸あるいは全裸の男女が集会をひらいており、そこに添えられた小さなテキストでは、ラテン語で、「人を食う人間たちが人肉を食い、毒矢で戦う」(Canibales carnibus humanis vescuntur ac venenatis sagittis proeliantur)と説明されている。したがって、何の集会であるかは明白である。木の枝には人間の四肢と頭部とおもわれるものが吊されており、たき火でその一部を串に刺して焼いている。セプールベダのいう、「人肉嗜食」(カニバリズム)である。また、集団の両端には戦士とおもわれる人びとが弓を手入れしたり、敵あるいは鳥(オウム、極楽鳥)に向けて弓を引き絞ったりしている。

もちろん、人食いについて述べたのはセプールベダが最初ではない。カリブないしカニブは、人食いが住むという伝説にちなんだ地名であるし、すでにコロンブスが、ルイス・デ・サンタンヘル(Luis de Santangel, アラゴン王国の財務長官で航海の資金を工面した)宛ての書簡でこれに触れている。この書簡は1493年に印刷されてもいた。また、人体の一部を木に吊し、焼いた肉を串に刺すようすについては、1494年のピエトロ・マルティーレ・ダンギエーラ(Pietro Martire d'Anghiera, 1459-1526)の書簡に由来するといわれる<sup>22</sup>。ただし、ダンギエーラは、それらは戸外ではなく、小屋のなかにつり下げられているとしたのであった。

だとすれば、これは何か別の地図の表象を模倣した

ものであろうか。しかし、たとえばロポ・オーメンによる1519年の「ミラー・アトラス」でのブラジルの描写には、弓矢を手にしたインディオは描かれているものの、そこに見られるのは、オウム(極楽鳥)やサルに囲まれ、鳥の羽根で着飾る人びとの平和的な姿である<sup>23</sup>。しかしながら、いっぽうで、ディオゴより少し後のスペインの地図製作者ディエゴ・グティエレスが1562年にアントウェルペンで出版した『アメリカないし第四の大陸地図』(Americae Sive Quartae Orbis Partis Nova et Exactissima Descriptio)には、インディオのカニバリズムが、かなり小さめであるが、はっきりと描かれている<sup>24</sup>。

むろん、地図の系譜の証明にはなおも広汎な渉獵が不可欠であり、これらの比較だけでは十分とはいいがたいが、少なくともここでわかるのは、ポルトガル人(ロポ・オーメン)の製作した地図と、スペイン人(グティエレス)の地図の対照的な表象であろう。すなわち、ロポの地図におけるインディオは平和で友好的だが、ディオゴの南米地図では、グティエレスのそのように、インディオの「悪習」が強調されている。しかも大きく、目立つように。そして、インディオはブラジルの周辺に集まり、反ポルトガルの態度をしめしている。

つまり、この地図は、インディオの習俗を再確認することで、スペインによる南米大陸の支配の正当性を主張するだけでなく、インディオの支配をつうじて、ポルトガル領ブラジルのスペインによる領有さえもほのめかすものだった、といえるのではないだろうか。

## むすびにかえて

前述のセプールベダの言説と、ディオゴ・オーメンのアトラスにおける表象は、この部分で結び合わせることができるだろう。しかも、ディオゴは、その先の具体的な政策の方向性をも指し示しているといえる。はたしてバリアドリード論戦の要点がイングランドまで届いていたかどうかは不明だが、そしてまたその点

で、伝承と現実との区別が可能であったかどうかとも判別しがたいところだが、しかし、新大陸における政治的状況について多くの情報が採り入れられていたことは確実である<sup>25</sup>。また、亡命ポルトガル人であり、二度と故国の土を踏むことのなかったディオゴが、ポルトガルにたいしてそもそも批判的であったことは想像に

22 ダンギエーラ(アンギエーラ)については、J.R.ヘイル編『イタリア・ルネサンス事典』東信堂、2003年、27頁。

23 Atlas nautique du Monde, dit atlas Miller, Feuille 2 r° : Océan Atlantique Nord-Est et Europe du Nord, in: Gallica (<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b55002607s/fl.item>).

24 Americae sive quartae orbis partis nova et exactissima descriptio, in: Library of Congress Geography and Map Division Washington (G3290 1562 .G7; <https://www.loc.gov/resource/g3290.ct000342/>).



図4 ビサロの軍隊と推定される露営



図5 「人肉嗜食」として描かれたインディオ

難くない。ただ、その表象は、スペインによる支配にあまりに親和的である。「支配の徴表」としたゆえんである。

ここで、このアトラスが『メアリー一世のアトラス』と称されることが問題となる。アトラスは、1555年から1559年までのイングランド滞在中に製作された。おそらく1558年までには完成したと推定される。写本地図は発注者がいなければ製作されないの、1553年に即位した女王メアリー一世が、これに比定されるのである。ただし、それを実証する史料はまだ見つからない。

メアリーは当初、王位継承者の地位を与えられていたが、母キャサリンとヘンリー八世の離婚により、婚外子として継承権を失った。キャサリンはアラゴンのフェルナンドとカスティーリャのイザベルの娘であり、姉はスペイン女王フアナ一世である。したがって、カルロス一世は甥にあたり、その息子フェリペとメアリーとの結婚は近親婚である。しかし、メアリーは王位継承争いからカトリック政策を推し進め、スペインとローマ教皇庁に接近する。フェリペのイングランド共同統治権には、さまざまな条件が付されていたが、国内勢力を糾合するのが困難であったメアリーにとって、スペインからの支援は、魅力的なものであったろう。かりに、その見返りのひとつがこのアトラスであったならば、アトラスの製作と贈与がもたらすいわば象徴的行為の

影響の如何が考察されなければならない。

また、アトラス（地図集・地図帳）の場合、地図単独ではなく、全体をつうじた体系性を考慮すべきである。本稿ではとくにスペインと南米大陸の関係を論じたが、いっぽうで、イングランドはどのように位置づけられているのかという問題は今後の課題である。その他にも、ディオゴ・オーメンがそのなかで新世界にかんする情報を得たであろう人的サークルあるいはコミュニティの実態、『メアリー一世のアトラス』製作の経緯、さらに、16世紀における写本地図、印刷地図等のテキストおよびイメージの継承や発展などについても調査と分析を進めていきたい。

これにより、イングランドがスペインにたいし、国家をこえて覇権の承認を与えるような図像を描いた理由が（あるとすれば）どこにあるのかという問題が解明され、学的複合領域としてのコスモグラフィの発展の先に生まれる、いわばトランスナショナルな関係の成立過程が明らかになるだろう。

※本稿は平成25～27年度科学研究費補助金・基盤研究(C)・研究課題名「ヨーロッパ近世における地域間統合システムの研究」の成果の一部である。

(おがわともゆき 学術資源研究公開センター助教・  
附属図書館協力研究員)

25 この地図には、その他に数名の人びとが地面を掘るようすや、木を伐採するようすも描かれている。地面を掘るのは、スペイン人による鉱山の発掘、また木の伐採は、ポルトガル王室の専売であった赤い染料ブラジリンの採取をしめしていると考えられる。この染料は常緑樹であるパウ・ブラジル（和名ブラジルボク）から採取されるもので、ブラジルとはポルトガル語で赤い木を意味する。国名の由来である。